(O-9)

技術職員による研究会とその役割
～解剖・組織技術研究会について～

佐々木 健[1,2]、佐藤 康二[2]、岩下 寿秀[1,3]
（浜松医科大学　[1]技術部、[2]器官組織解剖学講座、[3]再生・感染医学講座）

SASAKI Takeshi, Sato Kohji, IWASHITA Toshihide :

Conferences established by technical staff and its roles. ~ Society of Anatomy and Tissue Technologists ~

Anatomical dissection for students is essential for anatomical education in medical and dental schools, and technical staff play a major role in it. However, in the past, there were almost no conferences to which these technical staff could belong or training programs that they could attend. For this reason, two organizations, the National Association of Voluntary Anatomy and the Society for Anatomical Tissue Technology, were established to provide training and hold research meetings for technical staff. This report introduces these organizations.

1. 緒言

医･歯学部の解剖学教育においては、篤志献体による人体解剖実習が行われる。国内初の篤志献体願の申請は 1868 年と言われ、実際に篤志献体の解剖が行われたのは 1869 年とされており（美幾という女性）、篤志献体による解剖には非常に長い歴史がある。現在、各大学において、この献体（ご遺体）の保存・管理の実務を担当するのが、解剖学教室に所属（配属）されている技術職員である。このご遺体を扱う業務については、特殊性に加えて秘匿性も要するため、過去にその手技等は機関毎に独自に発達し、言わばガラパゴス状態の傾向があった。これに加えて、上述のような業務の性質から、各機関で生じる業務上の問題や疑問も、その機関内で解決することになりがちで、そのまま問題が先送りされることもしばしばあった。

2. 篤志解剖全国連合会の設立と研修会の開始

篤志家による献体運動や献体団体の結成は、1950年代（昭和 30 年ごろ）に全国各地で始まり、それぞれ独自の運営を行ってきた。当時、献体団体と献体の受け入れ先である大学との連携は十分ではなく、また全国レベルでの献体運動推進の機運の高まりから、日本解剖学会を通じて献体団体と各大学による篤志解剖全国連合会（全連）が 1971 年 3 月に設立された。この全連はその年に第 1 回総会を開催し、その 7 年後の 1978 年 3 月に「合同研修会」を開催した。さらにこの合同研修会とは別に、「献体実務担当者研修会」の第 1 回を 1984 年の秋に仙台にて開催した。これ以降、全連が主催する研修は、春の「合同研修会」と秋の「献体実務担当者研修会」の二本立てとなった。これらの研修会の趣旨は「献体に係わる全国の教員、技術職員、事務職員、篤志会会員が、実務上の問題点や改善方法、献体を取り巻く全国の状況について意見交換を行う」であるが、技術職員だけではなく、教員や事務職員、さらには献体団体の会員も巻き込んでいることが特徴的である。なお、この第 1 回献体実務担当者研修会の内容は以下のとおりであるが（図 1)、まだ第 1 回ということもあり出席大学や出席者数は多くなく、議題も研修というよりは会議に近いものが目立った。

仙台市　グリーンホテル仙台　会議室
36大学41名出席

議題　実務に関する話し合い
1. 感謝状伝達方法
2. 献体登録に関する件
3. 登録者団体に関する件
4. 経費の捻出、支払方法

図 1. 第 1 回献体実務担当者研修会の参加状況や実務に関する議題

一方、最新の第 41 回献体実務担当者研修会の内容を図 2 に示す。図に示すように、実務者（献体担当の事務職員）による講演や、小人数グループに参加者を分けて別々のテーマ（ご遺体の保管や管理法、技術職員の働き方や人材問題、献体事務、CST、献体に関する各種情報管理など）で意見交換や討論を行うグループワークなど、実務者の日ごろの業務に即した内容になった。

4. 講演	13:40～ 14:00	遠藤 京子 氏(東海大学医学部事務職員・献体実務担当者) 「リスク管理の第１歩はネットワーク作りから ～神奈川県献体協議会の活動を通して～」
5. ワークショップ説明	14:05	影山 幾男 副会長
		～移動～ ※全連側で予めグループ分けと、グループごとの場所を指定いたします
5. ワークショップ （グループワーク）	14:15～ 16:15	少人数グループで意見交換、討論
～休憩～	16:15～ 16:30	
6. 発表	16:30～ 16:55	1)各グループ代表者による討論内容の要旨発表と質疑応答 2)会長より総括

図 2. 第 41 回献体実務担当者研修会の内容、テーマは「献体実務のリスク管理『更なる』強化に向けて」

3. 解剖･組織技術研究会の設立と研修会

全連の研修会は「献体に係わる全国の教員、技術職員、事務職員、篤志会会員が、実務上の問題点や改善方法、献体を取り巻く全国の状況について意見交換を行う」という趣旨であった。この研修会を重ねるうちに、技術職員の中から、より技術的な内容に特化して意見交換や技術研鑽を積む会の開催も望まれるようになった。このような背景を基に、「第 1 回解剖技術研究･研修会」という技術職員が中心となった研修会が、1999 年に杏林大学において開催された。そしてこの 3 年後の 2002 年の「第 4 回解剖技術研究･研修会」から、会員、会則、幹事規定等を有する「解剖･組織技術研究会」という団体が日本解剖学会の支援の下で発足した。なお、第 1 回の研修会の開催資料は現存しなかったため、以下に第 5 回研修会（2003 年）の研修会の資料を示す（図 3）。

	第５回（久留米大学）３月３１日	
2003	櫻井秀雄 （獨協医大）	解剖実習室改装の一例　獨協医科大学の場合
	松野義晴、川端由香、小宮山政敏、門田朋子、森 千里 （千葉大）	コメディカル機関に対する解剖実習見学法に関する報告および今後の課題
	熊谷謙一 （岩手医大）	マイクロスライサーによる生組織・切片作成の工夫と応用
	長武　均 （鳥取大）	走査電顕加熱観察法による生物試料の観察
	佐々木孝志，羽澤和美 （旭川医大）	旭川医科大学における系統解剖実習と遺体防腐処置の環境向上について
	福田　覚 （東京大）	電子顕微鏡とともに30年
	【教育講演】 山下 和雄 （日本医大）	大型組織標本の作製とデジタル写真化について

図 3. 第 5 回解剖組織技術研究会･研修会の講演内容、会員の技術職員の発表や解剖学教授による教育講演で構成されている

さらに 2003 年から、全連が秋に開催する「献体実務担当者研修会」に合わせて、解剖･組織技術研究会も秋の「研修会」を開催するようになった（図 4）。

4. 解剖･組織技術研究会のその他の活動

解剖･組織技術研究会は上述の年２回の研修会以外に、技術研鑽を促すための「認定解剖組織技術者資格」取得の推奨、会員の疑問や問題の相談窓口となるメーリングリスト（ML）の運用、全国の大学の献体取り扱いの参考書となる「献体取り扱いマニュアル」の作成も行っている。この中でも、特に ML は会員や各大学のちょっとした手技の相談や、緊急性を要する課題解決に極めて役立ち、さらに、諸問題について会員に対してアンケート調査を行い、そこから新たな発表や解剖学会への提言につながるケースもあった。

11:05～12:00　教育講演　座長：櫻井 秀雄（獨協医科大学）
「本邦における臓器提供・臓器移植の現状と JOT の取り組みについて」
公益社団法人 日本臓器移植ネットワーク 事業推進本部あっせん事業部
部長 大宮 かおり

12:00～13:10　昼食・休憩

13:10～13:20　一般演題　座長：柳澤 一裕（藤田医科大学）
「東京歯科大学について」
平出 百合子（東京歯科大学）

13:20～13:45　「技術職員の休日の献体業務に関する調査結果について」
佐々木 健（浜松医科大学）

13:50～14:40　グループテーマ別 small 座談会
テーマ　「解剖実習サポート（教育に関しての関わり）」
「防腐固定処置」
「献体受け入れから火葬について」
「カビについて」

14:40～15:00　総括発表（各テーマ）
15:00～15:30　施設見学（東京歯科大学解剖実習室）

図 4. 2024 年に開催された第 20 回解剖･組織技術研究会の研修会(秋)、教育講演、一般演題に加えてグループワーク等、近年は多岐に渡った内容になっている

5. まとめ

篤志献体による解剖実習に係わる全国の技術職員には、その技術研鑽に資する研修団体が 2 つあり、合計年 4 回の研修の機会に恵まれている。特に、技術職員により設立された解剖･組織技術研究会は、自分たちの実務やそこから発生する諸問題解決、さらには自己研鑽に極めて効果の大きい団体である。このように、お互い切磋琢磨して技術を磨き合う「仲間」という存在は、技術職員に留まらず非常に大切であると感じた。

参考文献

篤志解剖全国連合会について（日本財団図書館 HP）
https://nippon.zaidan.info/seikabutsu/2002/00733/contents/008.htm
解剖･組織技術研究会 HP
https://square.umin.ac.jp/ks-giken/index.html